

私に影響を与えた一冊

mutyaun

私に影響を与えた一冊

孤独と読書には、切ってもきれない繋がりがある。

一人の時間を作らなければ、本を読むことはできないからだ。

誰しも人生に悩む時期はある。

そんな時に手を差し伸べてくれるのは、目の前にいる人ではなく、案外本の向こう側にいる国も時代も違った作者であったりする。

私に影響を与えた一冊は、清少納言著「枕草子」だ。

春はあけぼのから始まるこの古典は、一見花鳥風月を愛でるだけの作品だと思われがちだが、なかなかどうして奥が深い。

風流な美や風景画のスケッチめいた文章もあるが、人生観や処世訓、説話めいた話まであって面白い。

何度膝を打って、「あるある！」と叫び、痛快さに笑ったかわからない。

たとえば清少納言は本文において、こう述べている。

「説法する法師はイケメンがいい。顔がぶさいくだといつよそ見をして、身を入れて説法が聞けないから。

やっぱり見た目がよくてこそ、ありがたいお話だなと思えるのだ。

でもこんなことを言うのはやめておこう。若いころは怖いもの知らずだったからいろいろ言えたけど、今となっては仏罰が恐ろしいわー」

また、

「人の悪口を言うことほど面白いことはない。なのに悪口を言うのを怒る人って意味がわからない。誰だって言いたくなるのが悪口でしょう。仲のいい人の悪口は言わないけど、それはかわいそうだから。もしそうじゃなければ、思い切り言ってるわよ」

かなり乱暴な意識だが、だいたいこんなことを言っている。

バツサリとざっくばらんに語る彼女に、何とも言えないカタルシスを覚えた。

同時に、彼女が置かれていた状況を重ね合わせると、いっそう深みを増して感じられる。

零落をたどる中宮定子に仕えていた清少納言。栄華を誇っていた勢力の衰退を間近に見つめているながら、彼女はあくまで明るさを失わない。枕草子に通奏低音として流れる哀しみは、美しさと潔さを凛冽に際立たせる。散り際の桜のように。

絶望の底で、それでも笑うことのできる強さを、私はこの本からもらった。

そして何より私を支え励ましたのは、「千年前でも今でも変わらず、通じ合えるものがある」ということだ。

違う時代を生きた人の考えに共感することで、世界は大きく広がり、私の人生は豊かになった。

一度きりしかない人生を、本を読むことで何度も生きることができる。

他者とのつながりは社会生活だけでなく、あらゆる時代を超えて可能なのだと、「枕草子」は私に教えてくれた。

難解な古典という風に見えて、実は身近な友人となってくれたこの本は、これからも多くの人に

愛され、読み継がれていくのだろう。